

群 教 セ	G10 - 01
	令6.287集
	道 徳

# 多面的・多角的な視点で、自分事として 道徳的価値の理解を深める生徒の育成 ——生徒同士のインタビューを中心とした学習活動を通して——

特別研修員 宮崎 瞳

## I 研究テーマ設定の理由

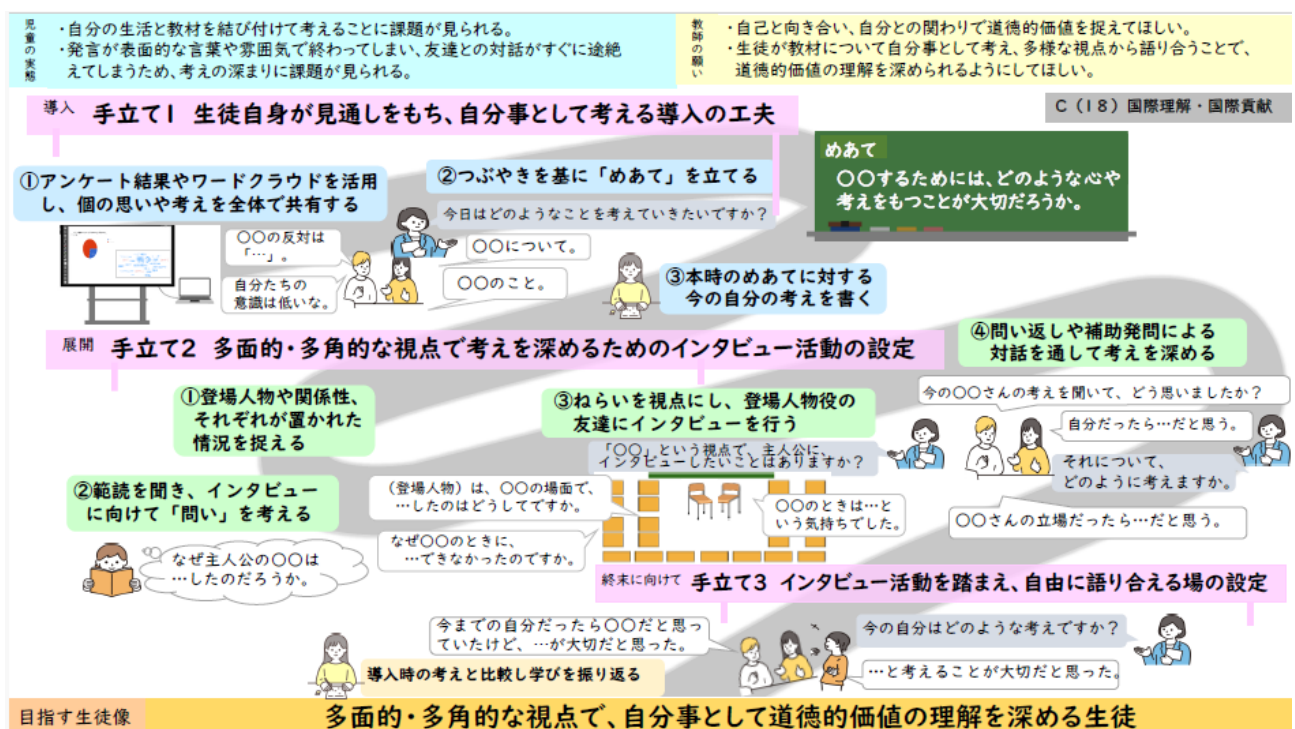
中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別の教科道徳編では、「答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』、『議論する道徳』へと転換を図るものである」とされている。また、令和6年度群馬県学校教育の指針では、目指す姿を「道徳的価値について、広い視野から多面的・多角的に考え、自分との関わりの中で理解を深めている」としている。また、指導の重点として、「考えさせたいことを明確にし、多様な視点から話し合う場面の設定」が示されている。

研究協力校（以下、協力校）の生徒は、自他の考えを大切にし、一人一人の考えを認め、うなずきながら取り組んでいる様子が見られる。道徳科の授業において、意見交流を通して、多様な考えがあることに気づき、共感したり、異なる見方をしたり、問いに対する自分の考えを述べたりする力が育ってきている。しかし、自分の生活と教材を結び付けて考えることに課題が見られる。また、発言が表面的な言葉や雰囲気で終わり、友達との対話がすぐに途絶えてしまうため、考えの深まりにも課題が残る。特に、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」や「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」については、その傾向が顕著に見られる。

そこで、自己と向き合い、自分との関わりで道徳的価値を捉え、生徒が教材について自分事として考え、多様な視点から語り合うことで、道徳的価値の理解を深められるようになってほしいと考え、本研究テーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 研究上の手立て

道徳科の授業で、自分の生活と教材を結び付けて考えることや、発言が表面的な言葉や雰囲気ですべて終わってしまい、友達との対話がすぐに途絶えてしまうため、考えの深まりに課題が見られるという生徒の実態を踏まえ、研究主題である「多面的・多角的な視点で、自分事として道徳的価値の理解を深める生徒の育成」につながると考え、以下の手立てを講じた。

### 手立て1 生徒自身が見通しをもち、自分事として考える導入の工夫

導入では、事前アンケートの結果を基に、生徒自身が本時のめあてを設定し、以下の工夫をする。  
①アンケート結果を基に、個の思いや考えを全体で共有する。②生徒のつぶやきを基に生徒と一緒に本時のめあてを設定する。③終末の振り返りで考えを比較し、学びを振り返ることができるよう、めあてに対する今の自分の考えを書く時間を確保する。

### 手立て2 多面的・多角的な視点で考えを深めるためのインタビュー活動の設定

展開では、多面的・多角的な視点で道徳的価値を深めるためのインタビュー活動を設定し、以下の工夫をする。  
①範読前に、登場人物や関係性、それぞれが置かれた状況を捉えられるよう、写真や動画を提示する。  
②生徒同士のインタビュー活動につなげるため、教師の範読を聞き、インタビューしたい「問い」を考えるよう促す。  
③生徒同士の対話からねらいに迫れるよう、ねらいを視点にし、登場人物役の生徒にインタビューを行う。  
④問い返しや補助発問による対話を通して、生徒が考えを深められるよう、「〇〇についてどう思うか」「なぜそう考えたのか」など問い掛ける。

### 手立て3 インタビュー活動を踏まえ、自由に語り合える場の設定

終末に向けて、教材を通して考えたことから自分事として道徳的価値の理解を深められるよう、インタビュー活動を踏まえ、考えを聞きたい相手と自由に語り合える場を設定する。

## Ⅲ 実践例

- 1 主題名 垣根をこえて 内容項目 C-(18) (第2学年・2学期)  
教材名 「六千人の命のビザ」(出典:「新しい道徳 2年」東京書籍)

### 2 本主題について

#### (1) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、C-(18)「国際理解、国際貢献」に基づき、「世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること」に関する内容項目である。

グローバル化が進む現代社会において、多様な文化や価値観をもつ人々と共生することは不可欠である。中学生には、国際的な視野をもち、日本人としての自覚と責任感をもって、世界の平和と発展に貢献できる人材に育ってほしいと考えている。そのためには、各国の伝統や文化を尊重し、すべての人が平等に扱われるべきという普遍的な価値観を理解することが重要である。生徒たちが、異なる文化をもつ人々も自分たちと同じ人間として尊重しようとする道徳的心情を深く考えていくことが求められる。

#### (2) 生徒の実態について

本主題に関わるアンケートを実施し、「外国で起きていることに興味や関心がある」と答えた生徒が30%であり、半分以上の生徒が外国で起きていることについて興味がなかったり、世界の中の日本人としての自覚や立場について意識していなかったりしている生徒も多い。そこで、本授業を通して、多様な視点から国際理解について見つめることで、世界各国の諸課題に興味や関心を持ち、国際的視野に立ち、世界平和のために貢献しようとする道徳的心情を育てたい。

### (3) 教材について

本教材は、杉原千畝の苦悩と決断に至るまでの心情を考えることを通して、国籍や人種、民族などの違いを超えて、世界の中の日本人としてどう行動すべきか考えを深めることができる。杉原千畝の決断は、深い人間愛に基づき、国際的視野に立った行動であり、その勇気ある選択の背景には国境を超えた大きな愛が存在していることに気付かせたい。以上のことから、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする道徳的心情を育てることに適した教材である。

## 3 授業の実際

### (1) 手立て1について

生徒が自分たちの実態から問題意識をもち、めあてを設定できるよう、「①外国に興味・関心がありますか」「②外国のどんなことに興味・関心がありますか」という事前アンケートを行った。導入では、その事前アンケートの結果をICTで提示した(図1)。①のアンケートから、興味・関心が低いという自分たちの実態に気付き、②のワーククラウドから「戦争の反対の言葉は？」と問い掛け、「平和」と生徒が答えた(図2)。教師が「今日はどのようなことを考えていきたいですか」と問い掛けた。生徒からは、「平和のこと」や「世界のこと」などのキーワードが挙がった。それらの生徒の言葉を紡ぎながら「世界の人々が平和に暮らすために、どのような心や考えをもつことが大切だろうか」というめあてを設定した。その後、めあてに対する今の自分の考えをワークシートに書く時間を確保した。

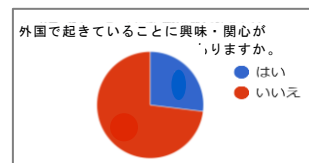


図1 アンケート①のグラフ

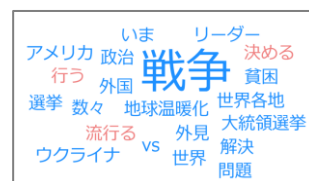


図2 アンケート②のワーククラウド



図3 インタビュー活動の場の設定

### (2) 手立て2について

範読前に、インタビュー活動に向けて、登場人物の杉原千畝や第二次世界大戦、ユダヤ人に関する歴史的背景などに関する状況を写真で確認した。その後、生徒は範読を聞き、インタビューに向けた「問い」を考えた。千畝役として2名の生徒を教卓前に着座するよう促した(図3)。「『決断』という視点で、千畝さんにインタビューしたいことはありますか」と問い掛け、インタビュー活動を行った。インタビュー活動での生徒の発言を基に、教師が意図的に問い返しや補助発問による対話を通して、生徒が多面的・多角的な視点で考え、道徳的価値の理解を深められるようにした(図4)。

### (3) 手立て3について

終末に向けて、教材を通して考えたことから自他の考えを比較し、自分事として道徳的価値の理解を深められるよう、インタビュー活動を踏まえ、考えを聞きたい相手と自由に語り合える場を設定した。

S: ナチスドイツによって自分も命の危険にさらされるかもしれない中で、なぜビザを発行したのですか。  
RS: 家族には手を出さないだろうから、覚悟の上で、自分の命よりも多くの命を優先したいと思ったし、その方が国にも貢献できると思ったから。  
T: 今の千畝さんの考えを聞いてどう思いましたか。  
S: 自分のことだけではなく他の人のことも考えていてすごいな。  
S: 自分だったらその覚悟はもてないだろうし、国に帰ってしまうと思うから、その覚悟をもてるのはすごい。  
RS: ドイツとの同盟が崩されても、大量虐殺は耐えられないから、助けたい気持ちが大きい。  
T: 助けたい気持ちが強ければルールを破ってもよいでしょうか。  
RS: 国のルールを破ることはよくないが、相手の命を守るためなら仕方ないことだと思う。自分がユダヤ人の立場だったら、理不尽だなと思う。  
T: 千畝さんから「家族」という言葉が出てきたけど、あなたが千畝さんの家族の一員だったら、千畝さんの決断について賛成しますか。反対しますか。  
S: 国のために命を懸けて働く父は自慢のお父さんだと思えるから賛成する。  
S: 普通の暮らしをしていたのに、急に安全な生活ができなくなると思うと、反対する。  
S: 難しいなあ。最初は家族も今後の生活も大切だから、最初は反対するが、多くの人の命と考えると賛成する。  
T: あなたがユダヤ人の立場だったら、どんな思いですか。  
S: 怖い。助けてほしい。傷つく。

(S:生徒、RS:千畝役の生徒、T:教師)

図4 インタビュー活動の生徒の対話と教師の補助発問

#### (4) 考察

手立て1では、本時のめあてのキーワードにつながる項目や道徳的価値に関する生徒の実態を把握できるような項目のアンケートを事前に行ったことで、自分との関わりから道徳的価値を考え、生徒自身が見通しをもって本時の学習に向かうことができたと考える。

手立て2では、写真や動画等を提示したことで、実際の登場人物に関わる状況を捉え、視点に沿った「問い」を考えることができた。また、千畝役の生徒にインタビューを行うことにより、自分が今本当に聞きたいことを直接問い掛け、教材文だけではなく、千畝役の生徒の表情や言葉から心情を捉えることができた。さらに、インタビュー活動を通じた対話や教師からの問い返しにより、多面的・多角的な視点で自分の考えを深めることができたと考える。

手立て3では、終末に向けて自由に語り合える場を設定したことで、教材文について「自分が逆の立場だったらどうなのかなと考えることが大切なのかな」「一人一人が責任をもち、協力し合っていかなければならない。世界全体で一人一人の命を大切に、尊重し、相手を大切にしようとする考えをもつことが大切だ」など自分事として考え、交流・対話を通して自分の考えを整理しながら道徳的価値に迫り、振り返りにつなげることができたと考える（図5）。

2回目の授業実践後、生徒に「道徳科の授業で、インタビュー活動を取り入れるようになり、授業に対する取組や考えの深まりなど、具体的に変化したことや成長したことはありますか」というアンケートを実施した。「教材に出てくる人物の気持ちに近づけるようになり、質問することにより相手の気持ちを理解できるようになった」、「一つの視点からではなく、様々な視点からより深く考えられるようになった」と答えている生徒が多く見られた。以上のことから、本研究で行った三つの手立てが、有効であったと考えられる。

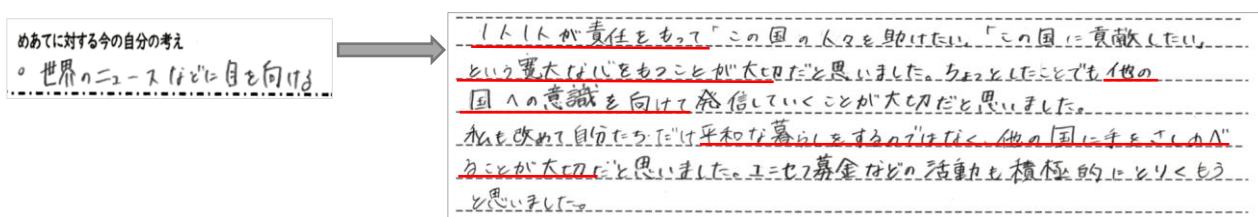


図5 導入時と終末時の生徒の考えの変容

## IV 研究のまとめ

### 1 成果

導入では、アンケートの結果やワードクラウドを活用し、自分たちの実態を把握することで、本時の道徳的価値に気付き、「どんな心が大切なのだろうか」「何が必要なのだろうか」など、自分の言葉でめあてを設定し、自分事としてねらいに向かうことができた。そして展開では、インタビュー活動を通して、授業者が事前に準備して「与える」問いではなく、自分で考えた「問い」を基に、生徒はどの教材においても、「自分だったら…」「〇〇の立場だったら…」と自己と教材を結び付けて考えることができるようになった。また、インタビュー活動による対話を基に、教師による補助発問を通して、ねらいに迫ろうとする姿が見られた。また、「なぜそう考えたのですか」と相手に問い掛け語り合う中で、多面的・多角的な視点で自己と向き合い、道徳的価値の理解を深めていく生徒の姿が見られるようになった。

一年間、三つの手立てを取り入れた実践を重ねたことで、これまで教師主導で展開されていた50分間の道徳科の授業は、生徒が自分たちで道徳的価値の理解を深めていく姿が見られるようになった。

### 2 課題

ペアやグループの対話から道徳的価値に迫るため、教師が対話の内容を聞き取り、生徒の考えを広げたり、つなげたりしていくことが重要である。また、インタビュー活動を小グループで行うなど、生徒の実態に合わせて、より効果的な学習形態の工夫を考えていく必要がある。